

一歩前へ

平尾小・5 坂田 頼希

「おれ、サッカーやめる。」

これは、お母さんとお父さんをなやませてしまったぼくの一言だ。その日から一か月もたたない内に、ぼくの一週間と、休日のすろし方が変わった。

ぼくは、小学校一年生の四月にサッカースクールに入った。週に二日、一時間てい度の練習をしてきた。三年生になる時に、チームとて、試合に出場するメンバーになるかを選たくする時があつたが、ぼくはそのままスクール生のままサッカーを練習してきた。

学校の友達とも、公園でサッカーをするくらいぼくはサッカーが好きだつた。それなのに、

「おれ、サッカーやめる。」

とて、理由があつた。

公園で友達とサッカーをする時は楽しかつたのだが、サッカースクールの時になると気持ちがもやもやしてて、学校の友達は別のサッカースクールに入ていて、それがうらやましかつたからだ。自分のその気持ちに気づくと、心がいっばいになった。そしてあの言葉が、ぼくの口から飛び出した。

でも、それまで別のチームに入りたいと素直に言うことがなななかできなかった。友達と違て、ぼくは一度も試合に出たことがなく、いっしょにやていけるか少し不安があつたからだ。それでも、

ぼくの中にできてしまったもやもやは、どんどん大きくなてきて、そのせい、サッカーの練習が楽しくなくなてしまった。ちようどその時だつた。友達がサッカースクールの体験にさそててくれたのだ。ぼくは、

「よし。」

と思つた。体験に行つた時、初めて会つたコーチはきびしかつた。でも、わくわくした。すぐそこに友達がいるから、もつとがんばれそな気がした。体験に行く前に、

「まずは体験だけだよ。」

とお母さんに言われててたのだが、なんとその日に申しこむことになつた。

その日からあつていう間にぼくの毎日が変わった。今まで、外でサッカーをするのは、夕方の一時間だつたのが、土日にもサッカーの練習をしたり、試合をしたりするようになった。夏の昼間に九時間外にいる日や、サッカーのために車で二時間かけていどうする日もできた。お母さんはこの暑さを心配しててくれたが、ぼくは違つた。スケジュールを自分で見るようになった。練習がある日には必要な物を早目にじゅんびするようになった。そして、

「つかれたけど、それよりも楽しかつた方が大きい。」

とぼくは言つた。自分の考え方もずいぶん変わった。たくさんあせをかくことが気持ちよかつたり、自分のキック力について考えたりもするようになった。ぼくが新しいスクールに変わったことで、家族の生活も変わった。お父さんの休日のほとんどがぼくのサッカーでいっばいになったり、お母さんがサッカーに合わせてご飯を用意したりと、前よりもいそがしくなつた。ユニホームも買つてもらつ

た。ぼく自身も家族も大変なことが増えたけれど、ぼくは今でもあの一言が言えてよかったと思っっている。

サッカーをやめたわけではない。その時までのもやもやしたサッカーをやめたのだ。

ぼくは、このことからたくさん気持ちを学んだ。好きなことでも、がんばりたいと思えなくなる時があるということ。そういう気持ちや心の中で大きくなると、いつも心がもやもやして、いろいろなことへの自信をなくしたり、堂々としていられなくなったりするということだ。

ぎやくに自分の気持ちを素直に言えたことで、サッカーがもっと楽しくできるようになり、目標もできた。それだけではなく、もっともつと大切なことに気づいた。好きなことを大好きな友達といっしょにやるのが、楽しさを何倍にもふくらませ、上手になりたい気持ちも強くさせてくれるということだ。試合でゴールが決められるようになり、勝ちたいと思えるようにもなった。

ぼくのあの一言は、すぐに口から出せなかったけれど、出したことで、ぼくが一歩前へ進むための大きなきっかけになった。

今のぼくの口から出る次の言葉は

「よし、がんばろう。」

だ。これから先も、もつともつと前へ、ぼくは進む。